

30amF-499S

ダニ抗原誘発性皮膚炎に対するFTY720（フィンゴリモド）軟膏の治療効果（2）
○貝野 裕也¹, 向井 明日香¹, 辻 琢己¹, 吉田 侑矢¹, 藤多 哲朗², 河野 武幸¹
（¹摂南大薬, ²京大名誉）

【目的】アトピー性皮膚炎（AD）は、一般にステロイドの外用薬で治療されるが、治療に抵抗する症例も少なくない。演者らは既に、新たなAD治療薬を臨床に供給する目的で、ダニ抗原で皮膚炎を誘発したADモデル動物（NC/Ngaマウス）に対するFTY720の外用療法の有用性を報告している。本研究では、同モデルを用いてFTY720が皮膚バリア機能に与える影響について検討を加えたので報告する。

【方法】ダニ抗原を週2回、4週間塗布し皮膚炎を誘発したNC/Ngaマウスを、FTY720群、ベタメタゾン群、タクロリムス群及び軟膏基剤群に分け、2週間治療した。各群の皮膚バリア機能を調べるため、皮膚炎の程度（ADスコア）、表皮厚、経表皮水分蒸散量（TEWL）及びタイトジャンクション（TJ）を構成するタンパク質の一つであるclaudin-1のmRNA発現量を調べた。

【結果】FTY720群のADスコア（ 1.8 ± 1.7 ）、表皮厚（ $56 \pm 25 \mu\text{m}$ ）及びTEWL（ $16.7 \pm 9.1 \text{ g/m}^2/\text{h}$ ）は、基剤群のそれぞれの値（ 5.3 ± 0.1 , $128 \pm 53 \mu\text{m}$, $46.9 \pm 6.3 \text{ g/m}^2/\text{h}$ ）と比較して有意（ $P < 0.05$ ）に低下あるいは減少した。一方、claudin-1のmRNA発現量は、各群間で有意な差はみられなかった。これらの結果から、FTY720群のTEWLの減少（バリア機能の改善）は、皮膚炎の改善に伴った結果とも考えられるが、ADスコアとclaudin-1のmRNA発現量に有意な相関はみられなかった。即ち、本モデルではclaudin-1以外の要素もバリア機能の改善に重要であると考えられる。

【考察】演者らのこれまでの成果から、FTY720は既存薬に代わる優れたAD治療薬であると考えられる。しかし、claudin-1のmRNA発現量の結果から、FTY720が皮膚バリア機能に与える影響については、TJバリアだけでなく角質バリアを含めた検討が必要と考えられる。今後、角質バリアについて検討を加える予定である。